

澤瀉久孝編

伊勢物語

白

楊

社

澤瀉久孝編

〔新注古典選書 4〕

伊勢物語

白楊社

昭和二十四年九月廿五日第一刷印刷
昭和二十四年十一月一日第一刷発行
昭和二十七年一月五日第五刷発行

伊勢物語

定價 五十円

包送料 十円

版權所有

編者 沢 瀉 久 孝

發行所 京都市上京区紫竹下梅ノ木町三二 楊 社

發行所 京都市上京区紫竹下梅ノ木町三二 白 楊 社

發行所 京都市上京区紫竹下梅ノ木町三二 小 泉 桂

印刷者 京都市下京区猪熊通梅小路上九 中 村 勝 治

營業所

京都市下京区
不明門七条下ル 株式會社

白 楊 社

京都中央局私書函第二八番
電話下⑤二一七八一
番 振替口座京都一八六七番
出協會員A二〇八〇七八番

〔中村印刷株式會社印刷・路真社製本〕

凡 例

一、本書は、大學高等學校の教科書として編纂したものである。

二、本書の本文は、朱雀院塗籠本と呼ばれる高二位本の忠實な透寫本とされる不忍文庫舊藏本を、國文學祕籍叢刊の複製本により、字體を通行體に改めたほかは、なるべくそのまゝに翻刻した。ただ濁點や句讀點を附した段が若干ある。

三、底本にある書き入れは、大部分右傍にある。底本で左傍にあるものは、念のため、解説末尾に列記した。朱の書き入れ（主として撰集名）は都合で割愛した。

四、頭注は、他の撰集に同じ和歌の見えるものを掲げ、人名地名などを略説したほか、流布定家本（天福本系統）との異同を注した。流布本を注する時は歴史的假名遣にしておいたから、鎌倉時代の文字遣である底本に對し注釋的な役割をも果たすことと思ふ。

五、頭注でわかりにくい場合、本文の右に漢字をあて歴史的假名遣を注した。これは片假名を使ひ又（ ）に入れて、底本の書き入れと區別した。

凡 例

二

六、本書の編纂に當つては玉上琢彌氏を煩はした。

昭和二十四年九月一日

文學博士 澤 瀉 久 孝

塗籠本 伊勢物語 目次 (定家本章段對照表)

凡 例	解 題	本 文	段數	定家本章段數	頁
			一	一	一
		昔男ありけりうひかふりして……………	二	二	二
		昔男ありけり都の始まりける時……………	三	三	二
		昔男ありけり懸想しける女の許に……………	四	四	三
		昔東五條に大后の宮のおはしましける西の對に……………	五	五	四
		昔男ありけり東の五條わたりに……………	六	六	四
		昔男ありけり女のえ逢ふまじかりけるを……………	ナシ	ナシ	六
		昔男ありけり女を盗みて率て行く……………	七	七	六
		昔男ありけり京にありわびて東へ行きけるに……………			

九	昔男ありけり其の男身はようなきものに思ひなして……………	八・九	七
十	昔男武藏の國まどひ歩きけり……………	一〇	一〇
十一	昔男ありけり東へ行きけるに……………	一一	一一
十二	昔男ありけり女を盗みて武藏の國へ……………	一二	一二
十三	昔武藏なる男京なる女の許に……………	一三	一三
十四	昔男陸奥にすずるに至りにけり……………	一四	一三
十五	昔男みちの國へ行き歩きけるに……………	一五	一四
十六	昔みちの國に男住みけり……………	一五	一四
十七	昔紀有常といふ人ありけり……………	一六	一五
十八	昔年頃訪れざりける人の……………	一七	一六
十九	昔なま心ある女ありけり……………	一八	一七
二十	昔男官仕へしける女……………	一九	一七
二十一	昔男大和にある女を……………	二〇	一八
二十二	昔男女いとかしこう思ひかはして……………	二一	一九
二十三	昔はかくなくて絶えにける仲を……………	二二	二二

二四	昔田舎わたらひしける人の子供……………	二五
二五	昔男かたゐなかに住みけり……………	二四
二六	昔男ありけり逢はじとも言はざりける女の……………	二五
二七	昔男人の娘の許に……………	二七
二八	昔色好みなりける女……………	二八・二九
二九	昔男はつかなりける女に……………	三〇
三〇	昔男宮の内にて或御達の御局の前を……………	三一
三一	昔男津の國菟原の郡に住みける女に……………	三二
三二	昔男つれなかりける人の許に……………	三三
三三	昔男心にもあらで絶えにける女の許に……………	三四
三四	昔忘れぬなめりととひごとしける女の許に……………	三五
三五	昔男色好みなりける人を語らひて……………	三六
三六	昔紀有常ものに行きて……………	三七
三七	昔若き男けしうあらぬ人を……………	三八
三八	昔女はらから二人ありけり……………	三九

三十九	昔男好色と知る知る女を……………	四二	三
四十	昔かやのみこと申す御子……………	四三	三
四十一	昔あがたへゆく人に……………	四四	三
	昔宮仕へしける男……………	四五	三
四十二	昔すきものの心ばへありて……………	四六	三

(落丁カ)

四十五	昔男ねんごろにいかでと思ふ女……………	四七	三
四十六	昔男ありけりものへ行く人に……………	四八	三
四十七	昔男妹のをかしげなるを見て……………	四九	三
四十八	昔男ありけり人を恨みて……………	五〇	三
四十九	昔男人の前栽植ゑけるに……………	五一	三
五十	昔男ありけり人の許より飾りちまきを……………	五二	三
五十一	昔男ありかたかりける女に……………	五三	三
五十二	昔男つれなかりける女に……………	五四	三
五十三	昔男ふして思ひ起きて思ひ……………	五五	三

五四	昔人知れぬもの思ひける男……………	七	四〇
五五	昔心づきなま色好みなる男……………	八	四〇
五六	昔男ありけり宮仕へも忙しくて……………	六	四一
五七	昔筑紫まで行きたりける男……………	六	四二
五八	昔年來衰へざりける女……………	三	四三
五九	昔よ心ある女……………	三	四四
六〇	昔男女をみそかに語らふわざもせざりければ……………	四	四五
六一	昔帝の時めき使はせたまふ女……………	三	四六
六二	昔男つの國にしる所ありけり……………	六	四九
六三	昔男和泉の國に行きけり……………	六	四九
六四	昔男ありけり伊勢國に狩りの使に……………	六	五〇
六五	昔男狩の使より歸りけるに……………	七	五二
六六	昔男伊勢齋宮に内の御使にて……………	七	五三
六七	昔そこにありと聞きけれど……………	七	五三
六八	昔女をいたく恨みて……………	七	五三

六九	昔男伊勢國なりける女に又もえ逢はで	七	五
七〇	昔男伊勢國なりける女を又もえ逢はで	七	五
七一	昔二條の後の春宮の御息所と申しける頃	七	五
七二	昔きたのみこと申す御子	六	五
七三	昔氏の宮に御子生れたまへり	六	五
七四	昔衰へたる家に藤の花植ゑたる人	六	五
七五	昔左大臣にいまそかりける	六	五
七六	昔深草の帝の芹河の行幸したまひけるに	一四	五
七七	昔惟喬ときこゆる御子	六	五
七八	昔同じ御子交野に狩歩きしたまひける	六	五
八〇	昔水成瀬に通ひたまふ惟喬の御子	八	五
八一	昔男ありけり身は賤しながら母御子なりけり	八	五
八二	昔男ありけり童より仕うまつりける君	八	五
八三	昔いと若き男若き女を	八	五

八四	昔男つの國菟原の郡芦屋の里に	八七	六
八五	昔賤しからぬ男	八九	六
八六	昔つれなき人をいかでと思ひ	九〇	六
八七	昔月日の行くさへ歎く男	九一	六
八八	昔戀しさに來つつ歸れど	九二	六
八九	昔男身は賤しながら二つなき人を	九三	六
九十	昔二條の後の宮に仕うまつる男	九四	七
九一	昔男ありけり女をとかう言ふ事	九五	七
九二	昔堀河の大臣	九六	七
九三	昔おほきおとどと聞ゆる	九七	七
九四	昔右近馬場のひをりの日	九八	七
九五	昔男弘徽殿のはざまを渡りければ	九九	七
九六	昔男御子たちの逍遙したまふ所に	一〇〇	七
九七	昔なまあてなる男の許に	一〇一	七
九八	昔女人の心を恨みて	一〇二	七

九十九	昔男ありけり歌はたまざりけれど……………	一〇三	六
百	昔男ありけり深草帝に仕うまつりけり……………	一〇三	六
百一	昔ことなる事なくて尼になれる人……………	一〇四	七
百二	昔男かくては死ぬべしと……………	一〇五	七
百三	昔男友達の人を失へるが許に……………	一〇九	七
百四	昔男忍びて通ふ女ありけり……………	一一〇	七
百五	昔男やむごとなき女に……………	一一一	六
百六	昔男ねんごろに言ひ契れる女の……………	一一三	六
百七	昔男やもめにてゐて……………	一一三	六
百八	昔男久しう音もせで……………	一一八	六
百九	昔女あだなる男の形見とて……………	一二九	六
百十	昔いと若き人にはあらぬ……………	一三八	六
百十一	昔男女の未だ世に經ずとおぼえたるが……………	一三〇	六
百十二	昔男梅壺より雨につれて……………	一三三	六
百十三	昔男契る事あやまてる人に……………	一三三	六

百十四	昔男ありけり深草に住みけり……………	一三	……………	八
百十五	昔男いかなる事ぞ思ひける折にや……………	一四	……………	八
百十六	昔男都をいかが思ひけむ……………	一五	……………	八

一、「いとなまめいたる女はらから住みけり」

二、「この男垣間見てけり」
三、「いとはしたなくて」

四、「こちまどひ」

五、しのぶ摺り、奥州信夫郡の名産

六、六帖第五、すり衣

七、「おひつぎていひやりける、ついでおもしろき事ともや思ひけむ」

八、「みちのくの」みだれそめにし、六帖第五、すり衣。古今十四、戀四、「題しらず、河原左大臣、亂れむと思ふ」九、心ばへ

「一」昔男ありけりうひかふりしてならの京かすかのさとにしるよししてかりにいきけりそのさとにいとなまめきたるをむなはらずみけりかのとこかゝるまみてけりおもほえすふる里にいとほしたなくありければうちまとひにけり男きたりけるかりきぬのすそをきりてうたをかきてやるそのをとこ忍すりのかりきぬをなむきたりける

春日野のわかむらさきのすりころものふのみたれかきりしられ

す

となむをいつきてやれりけるとなんいひつきてやれりけるおもしろ

きことゝや

みちのくに忍もちすりたれゆるにみたれそめけむわれならなくにといふ歌のこゝろはゑなり昔人はかくいちはやきみやひをなむしけ

る

一、コノ句ナシ

二、「まだ定まらざりける時に、西の京に」

三、「まされりけりその人」

四、「まさりたりける。ひとりのみもあらざりけらし」

五、「歸り來ていかと思ひけむ」

六、「ついたち、雨そぼふるに」

七、古今十三「やよひのついたちよりしのびに人に物をいひて後に雨のそぼふりけるに詠みて遣しける在原業平朝臣、起きもせず」

八、大和物語参照

九、「ひじきも」和名抄鹿尾菜、辨色立成云、六味菜、比須木毛

〔二〕昔男ありけり。みやこのはじまりける時、ならのきやうはは

なれ、この京は人の家いまださだまらざりける時、西京にをんなあり

けり。その女、よの人にはまさりたりけり。かたちよりは心なむまさ

れりける。人その身もあらざりけらし。それを、かのためをとこ、

うち物かたらひて、かゑりきて、いかとおもひけん。時はやよひの

つひたち、雨うちそぼふりけるに、やりける。

をきもせずねもせてよるをあかしてははるのものとながめくら

しつ

〔三〕むかし、をとこありけり。けさうしける女のもとに、ひじき

といふものをやるとて、

おもひあらばむぐらのやどにねもしなむひしきものには袖をしつ

一、「二條の後のまだ」
 二、「仕うまつり給はで」
 三、「ひんがしの五條に大
 後の宮おはしましける西の
 對に」
 四、「心ざし深かりける人
 ゆきとぶらひけるを」
 五、「とをかばかりのほど
 に」
 六、「いきかよふべき所」
 七、「梅の花盛に、去年を戀
 ひていきて、立ちて見、居
 て見、見れど」
 八、「似るべくもあらず、う
 ち泣きて」
 九、「思ひ出でて」
 二〇、古今十五、戀五「五條
 の後の西の對に住みける人
 に、本意にはあらで物言ひ
 わたりけるを、む月の十日
 あまりになむ外へ隠れにけ
 る、あり所は聞きければ、
 え物も言はで、又の年の
 春、梅の花盛に、月の面白
 かりける夜、去年を戀ひて
 か、西の對にいきて、月の
 傾くまであばらなる板敷に
 ふせりてよめる。在原業
 平朝臣」

ゝも

五條後の、いまだ御門にもつかうまつらで、ただ人にておはしける
 時の事なり。

〔四〕昔、東五條におほぎさひの宮のおはしましける西のたいに、
 すむ人ありけり。それを、ほいにはあらで、ゆきとぶらふ人、こゝ
 ろざしふかゝりけるを、むつきの十日あまり、ほかにかくれにけ
 り。有所はきけど、人のいきよるべきところにもあらざりければ、
 なを、うしとおもひつゝなむありける。またの年のむ月に、梅華ざ
 かりなるに、こぞをおもひて、かのにしのだひにいきてみれど、こ
 ぞににるべうもあらず。あばらなるいたじきに、月のかたぶくまで
 ふせりて、こぞを戀て、よめる。

月やあらぬはるやむかしの春ならぬ我身ひとつはもとのみにして